

# 海水館という文学空間

伊 東 弘 樹

「キーワード ① 海水館 ② 月島 ③ よそ者 ④ 小山内薫『大川端』 ⑤ 島崎藤村「苦しき人々」

はじめに

文士たちはどのような場所や空間を体験し、どのような文学を生み出したのか。この問いの一端を、一九七〇年代以降の「都市論」は担って来たように思う。<sup>注1</sup> 先行研究により、江戸・東京の文学的な場は明らかに becoming するが、それらはいわゆる「下町」／「山の手」地域が中心であり、周縁とくに海浜部（ベイエリア）にはどのような文化が存在し、文学作品においてどのように表象されているかということはほとんど言及されていない。<sup>注3</sup> むろん、その背景には、西北に向かって宅地化され、東南とくに海浜部は埋立てられたという近代以降の歴史があったことも確かであろう。<sup>注4</sup> ただし、だからといって、近世より続くゆたかな海辺の風景も、またそれに促されるように発生した文学作品を埋もれさせてはいけない。<sup>注5</sup>

東京の海浜部の文学を掘り起こす手がかりとなるのが、明治

末期から関東大震災まで、新佃島東町一丁目二十六番地（現・中央区佃三丁目十一番十九号）に立地し、文士たちによって利用された割烹旅館兼下宿屋、海水館である。

本館について初めて言及したのは野田宇太郎で、その後、歴史家の豊島寛彰や明治学院藤村研究部などが当館の跡地を訪れ、二代目当主の坪井伊三郎氏から聞き書き調査を行った。<sup>注6</sup> 明治学院藤村研究部は調査研究の成果として記念碑を建立し、その「海水館の碑」は中央区教育委員会によって文化財の一つされ、以下のように説明された。<sup>注7</sup>

海水館の碑 所在 佃三―十一―十九

管理者 右同 海水館

海水館は明治三十年代の終り頃坪井半蔵によって営まれていた割烹旅館である。この地新佃島は明治二十九年（一八九六）に完成した埋立地で、房総を一望におさめえた雄大

な景観と人家などはほとんどない閑静な海岸であった。この環境を愛して明治四十年頃から大正の初年まで、島崎藤村・小山内薫・木下李太郎・市川左団次・市川団子・松崎天民・横山健堂・三木露風・吉井勇・久保田万太郎・日夏耿之介・佐藤惣之助・竹久夢二・木村莊八・五島邦彦等々が国近代文芸の夜明けを形成した文人達がここに集い、あるいは滞在した。島崎藤村は明治四十年から四十一年（一九〇八）に、長篇小説「春」を、小山内薫も明治四十一年長篇「大川端」をここで書いている。

また、小澤尚によってビジュアル的な図像が提示され<sup>注8</sup>、近年では中央区立郷土天文館（タイムドーム明石）や中央区立月島図書館で、海水館に関連した企画展示や展覧会が行われている<sup>注9</sup>。このように、様々な観点からの調査・報告を踏まえつつ、中央区（教育委員会）が統括する形で海水館への言及が行われてきたが、海水館の意義づけは未だ中途に終わっているようだ。それは、海水館がどのような背景のもとで誕生し、なぜそこに文士たちが集まり、そしてその文士たちがどのように海水館を表象したのか、ということが考察されていないことが理由として挙げられる<sup>注10</sup>。

よって、本稿では、海水館が建てられた①月島（新佃島）の歴史的背景や周辺の文化的背景を捉えつつ、②新聞記事や文学作品に表象される海水館を再考することで、海水館の意義を再考し、東京における海浜部の文学空間を浮かび上がらせたい。

## 第一章 海水館——その歴史的背景

### 海水館 以前

海水館が建てられた土地、新佃島は月島一〜四号地と同様に、東京港の築港・浚渫事業をもとに埋め立てられたものであった<sup>注11</sup>。その年次を示すと以下のようになる。注目すべきなのは、佃島と石川島を除くほとんどの土地が、都政を念頭に<sup>注12</sup>にした東京湾の開発によって、近代以降（特に明治二十年以降）に成立したということである。

|                    |          |        |
|--------------------|----------|--------|
| 月島一号地（現在の月島一〜四丁目）  | 一〇九五八三坪  | 明治二十四年 |
| 月島二号地（現在の勝どき一〜四丁目） | 八四一〇〇坪   | 明治二十七年 |
| 新佃島（現在の佃二〜三丁目）     | 三六三三三坪   | 明治二十九年 |
| 月島三号地（現在の勝どき五〜六丁目） | 四九三二三坪   | 大正二年二月 |
| 月島四号地（現在の晴海一〜五丁目）  | 二二〇〇六八坪  | 昭和六年四月 |
| 合計                 | 五〇九三三九七坪 |        |

月島周辺は川崎や横浜を結ぶ、東京湾岸の臨海工業地帯の一つとして発展してゆくが、特に機械・器具分野が発展したのは、

石川島造船所の下請けとして多くの工場が創設されたことが一因であった。明治三十四年八月五日付の『風俗画報』（第二三六号）では、このような様相を「月島は、將來工業發展の地なるべし。大小の工場、煙突隆起、煤煙漲らし、海風度る所、飄飄四散の状、太だ奇觀を呈せり」と伝え、日本鑄鉄株式会社のほか、月島製鋼株式会社、東京鑄鋼合資会社、株式会社月島車両製作所など、複数の工場や機関を紹介している。

日露戦争後、工業がより盛んになると、多くの労働者が集まり、人口が増加していった。それに伴うように住宅地が拡大し、インフラ整備が進められた。交通面では、従来の佃島渡船（明治十六年）や月島渡船（明治二十五年）に、深川と結ぶ相生橋（明治三十六年）が架設され、さらに勝鬨渡船（明治三十八年）が開通、その後、東京市電も通るようになった（大正十二年）。生活面では、相生橋架設と同時に水道及び電気が供給されるようになり、その後ガスも通るようになった（明治四十年前後）。施設面では、月島小学校（明治三十九年）と月島第二小学校（明治四十二年）が次々に創立され、築地警察署月島分署（明治四十一年）も設置された（図一参照）。

上記のように、月島周辺は近代的事業のもとに生まれ、工業によって各地域から労働者が集まり発展した土地であった。それゆえか、本地域はその区画の均質性に比例するかのごとく、地縁・血縁が薄い空間だった。大岡昇平はその均質的な風景を『少年』において以下のように表現している。幼少期、京橋区月島東河岸通三丁目六番地（現・中央区月島四丁目六番地）に



図一 大日本帝國陸地測量部「一万分一地形圖 東京近傍八號 新橋」明治四十二年測圖 大正十年第二回修正測圖より一部編集

あつたとされる「初枝おばさん」の家を訪れた際の想い出である（大岡昇平『少年』講談社文芸文庫、一九九一、一二五―一二六頁）。

月島へ上ったところは、西海岸通四丁目で、今日「晴月橋」で晴海島と連結する通りが真直に通っている。おばさんの家はその一つ東側の通りの突当りにあるのだが、月島の道は碁盤目になっているから、いつどこで曲つてもよい。どこで曲つてもトタン屋根の商店と町工場が並び、処々に空地のある殺風景な通りである。佃島の方から電車の入って来ている広い通りを突切る頃から、正面におばさんの家の門が見えて来る。せり持ちの鉄棒で支えられたガス灯が真中にあるのが特徴である。その門の前を南北に、つまり海岸と平行した通りが「東海岸通り」で、通りから海岸までの地所は、鉄工所や船大工や住宅によって占められている。

（筆者傍線。以下同）

月島の渡船場・東河岸通りから西河岸通りまで、つまり月島三丁目から四丁目にかけて、大正八年頃の風景が描かれている。それは碁盤の目になっている道に沿って、商店と町工場と住宅が同じように並ぶ殺風景なものだった。そして、訪ねた「初枝おばさん」の家も、「衆議院議員S」の妾宅であり、仮住まいでしかなかったのだ。

大岡の文章は一例だが、このように月島周辺は地縁・血縁の薄い、よそ者が集まる空間であった。なかでも海水館が位置し

ていた新佃東町は別荘地域と呼ばれ、周囲とは一線を画した別世界の様相を示していた。大正七年十一月から同九年秋にかけて行われた「東京市京橋區月島に於ける實地調査」（通称「月島調査」）の報告書には以下のように記されている。<sup>注13</sup>

月島一號地、同二號地の東部は工場地域であつて、月島二號地の西部、隅田川に面せる部分は倉庫地域であり、同一號地の西部、川岸には造船工場がある。全島の商業中心地は月島一號地の西部の中央に位し西仲通と稱し、商賣軒を並べてゐる。此等の工場及び工業的色彩の濃かなる裡にあつて、一種の異觀を呈するものが二つある。一つは佃島であつて、其の住民は漁業並びに之に關係せる業務に従事して居る。二は月島一、二號地、殊に新佃島の東部、品川灣に面接せる地域にある別荘地である（『第一輯（附録ノ二）』）。

確かに、約三万人の人口（大正八年時点）のうち六割近くが工業関係に、二割五分が商業に勤めており、ほぼ工場地と商店と住宅地で占められていたはずの月島に別荘地域があることは、「異觀」に思えただろう。別荘地域に関する情報は少ないが、『第一輯（附録ノ二）』の社会地図（第二図「工場仕事場及倉庫」）第三図其の一「住宅地（佃島及新佃島）」によれば、工場はなく倉庫が一軒あるのみで、住宅地もまばらな閑静な場所であつたことがわかる。また、同報告には、「第九図別荘地域」、「第

七十六図 海岸病院（新佃東町）」という写真も見えており、本地区が療養や保養を目的とした施設をも有していた事実が浮かびあがる。

### 海水館に集う文士たち

このように月島・新佃島は、近代的事業によって生まれ、インフラ（交通手段・水道・ガス・電気）が整いつつも、一種の無主・無縁の様相を示す土地であった<sup>注14</sup>。文士たちは、都市との接続を保ちながらもアジールの側面を持つ土地性に魅かれ、その中でも静かで過ごしやすい海水館を活用したのではないだろうか。

島崎藤村は『春』執筆の際に滞在した理由を、神津猛へ送った書簡（「東京京橋區新佃島東町海水館より」一九〇七年九月二十一日付）のなかで以下のように記している。「小生は閑靜なる境地に身を置くべく考へ、心は志賀の御宅の一室、又は布引の山寺等へ馳せ候得共、遠く家を離れて長逗留も意の如くならざる生の境涯なれば、東京の内を尋ねて、日曜毎に歸宅と定め昨日よりこの海岸にある宿へ引移り申候。この宿は友人にも告げず、只家のもの、知るのみに御座候。当時三人の娘を次々に亡くしていた藤村にとって、家から離れたくとも離れられない状況にあったことは想像に難くない。いつでも家に戻れる状況でありながら、一方で家や友人から逃れ「閑靜なる境地」に身を置いて執筆できる場所こそが、海水館であった。

藤村と同様に、海水館に滞在することで、一時的に地縁や血

縁から距離を置こうとしたのが吉井勇だった。吉井は大正二年の秋ごろから翌年の五月まで止宿しており、海水館での想い出を「新佃」（『雷歌隨筆』天理時報社、一九四二）に綴っている。

都會の中の放浪生活にすっかり疲れ果てた私の體は、まるでただ一人この世に生き残つた人のやうに、ぼんやりそこに坐つたまま、かなり長い時を過ごしてゐた。肉親のものからも友達からも、その外あらゆる人々からも、棄てられてしまつたと思はれるやうな寂しさを感じながら、さまざまのことを思ひ廻らしてゐると、ひとりでに目が潤んで來るのを如何することも出来なかつた。

海水館は吉井にとって、「都會の中の放浪生活」の終点であり、「肉親」や「友達」、「その外あらゆる人々」から離れられる場所であつた。「まるでただ一人この世に生き残つた」というほど世間から隔てられるような情感を得られたのは、月島そして海水館が水を隔てた世界であつたからか。重要なのは、その場所で感得した「棄てられてしまつたと思はれる寂しさ」が、後に創作の指針の一つとなつてゐることである。大正七年に刊行された歌集『毒うつぎ』（南光書院、一九一八）には、海水館を題材とした「新佃閑居」という二十三首の歌が詠まれており、そのほしきでは以下のように語られている。

新佃の一年の閑居は、われに忘れがたきおもひでを残しぬ。

寂しさはわれをしていかばかり命の尊さをおぼえしめけむ。  
悲しみの極まるところに立つは、われの心の滯標ならずや。

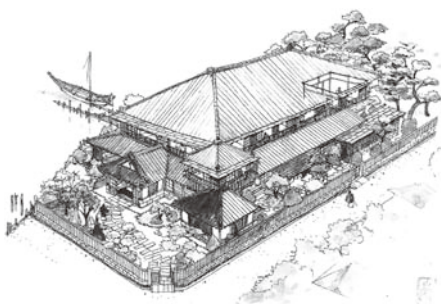
文士たちにとって、海水館とは、一時的に地縁や血縁そして  
世間から逃れ、自分自身の立脚点を見つめ直し、アイデアを育  
む場所であったといえよう。そして、繰り返しとなるが、それ  
を可能にしたのが、月島・新佃島という土地であった。

## 海水館 以後

最後に、海水館のその後を、画像資料を望みつつまとめる。<sup>注17</sup>

もともと、敷地一八五坪、建坪一三〇坪、和風二階建てで、  
二十部屋あった海水館は関東大震災によって割烹旅館としての  
営業を終えた（画像資料①）。その後は半分になった敷地で下  
宿屋経営が続いたようで、野田が戦後に訪れた際には「三階建  
の黒い壁をもった木造洋館」のアパートとなっていた（画像資  
料②）。角川写真文庫にもその頃の写真が残っている（画像資  
料③）。そして、「淡水魚・熱帯魚」や「教材模型」を扱う商店  
（画像資料④）を経て、現在のデザイン・ブザン・マン・ションへと至っ  
たようだ（画像資料⑤）。

① 小澤尚による海水館復元図



② 野田宇太郎による  
海水館スケッチ



③ 角川写真文庫の海水館写真



④ 『中央区の文化財』添付の  
海水館写真



⑤ 現在の海水館写真（執筆者撮影）



## 第二章 報じられた海水館

### ——文化的背景としての海水浴

#### 新聞広告から見る海水館

同時代の主要新聞のなかで、特に海水館の関連する記事を取り上げているのは、『読売新聞』であつたようだ。『朝日新聞』では一度掲載されるのみで、『毎日新聞』では一度も掲載されていない。「ヨミダス歴史館」のデータベース検索によれば、初めてその名が掲載されたのは、一九〇七年七月二十一日で、一九一五年六月二十日でもって最後の記事となっている。八年间で合計八回、うち「広告」二回、紹介的な記事「下宿屋通信」「軽便なる避暑」の二回、「読売俳壇」四回である。二つの広告と「軽便なる避暑」は以下のように記されている。

・「市内海水浴場 旅館高等下宿御休憩御晝食海水温浴設あり」  
(明治四十年七月二十一日)

・「市内海水浴場 海水温浴の設けもあり 涼風満室 房總の連山一眸の中」  
(明治四十年九月七日)

・「軽便なる避暑 京橋區東佃島海水館は前面に總房の連山を右に森ヶ崎羽田の岬を左りに江戸川口を望み得る形勝の地に位し鹽湯及び海水浴場の設備あり軽便避暑に適すと」  
(大正四年六月十日)

海水館の営業は明治三十九・四十年あたりであるから、二つ

の広告は営業より間もないものと考えられる。前者が「旅館」・「高等下宿」であり、「御休憩」・「御晝食」ができるとその全体的な利用方法を示している一方、後者は「涼風満室」、「房總の連山一眸の中」とある程度の認知を踏まえた上で、特色を強調している。「軽便なる避暑」の記事を見る限り、その名物の一つである景観は時がたっても変わらなかつたようだ。そして、全てに共通するのは、海水館が「市内海水浴場」の近くに位置し、その上で「海水温浴」の設備があるのを宣伝していることである。

このような当館の娯楽施設としての側面は、これまでの調査・報告にはほとんど見当たらない。よって、次節では当時の海水浴文化を提示しつつ、月島周辺の海水浴場の状況について考察することで、これまで見逃されて来た海水館の側面に光を当ててゆく。

#### 東京における海水浴文化

畔柳昭雄『海水浴と日本人』（中央公論新社、二〇一〇、三三三頁）によれば、「海水浴」はもともと、古代に「禊ぎ」といった信仰的な習わしであつたものが、中世の武家社会における「水練」や、市民社会における「潮（塩）湯」などと合わさり、近代の衛生思想や軍国主義を背景に発展したものであつた。その読み方も、明治中ごろまでは「ウミズユアミ」であり、泳ぐだけでなく、潮を浴びることも目的の一つだったという。そしてそれは古くから冷浴・温浴と共に行われていた。

このことは近代においても変わらず、小口千明「日本における海水浴の受容と明治期の海水浴」(『人文地理』第二一三号、一九八五年六月)では、海水浴場に海水温浴施設が併設されていたことが明らかにされている。海水浴が導入された当初、その目的は医療的な効能であり、各専門書では海水冷浴と海水温浴の二種類を行うことが推奨されていた。それに伴って、大野や大磯といった代表的な海水浴場をはじめ、ほとんどの場所で海水温浴施設が並置されたのだという。小口はこのような事実から、むしろ湯治に近い海水温浴こそが、海水浴文化の受容の契機となったことを論じている。確かに中世より続く「潮湯」の文化をふまえば、湯治―海水温浴―海水冷浴という歴史的な変遷は頷けるが、ひとまずここでは二つの浴場・浴法が重なり合うものであったことのみを確認する。

各地の海水浴場の発展を傍目に、東京においても、明治十五年頃から芝浦周辺に海水温浴施設が十軒ほど立ち並んでいたことが、『公衆浴場史』(全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会、一九七二年、一一六頁)よりわかる。眺望の良さから、休養遊覧と遊泳の客が集まり相当繁昌したとのことだ。遊泳場所については詳細な記載はないが、概ね品川海水浴場などが用いられたことが考えられる。大正末期ごろまで、海水温浴施設は二、三軒ばかり残っていたが、湾内の埋め立てと海水の汚染により、一般の浴場(銭湯)に姿を変えたという。

海水館営業の背景にこのような海水浴文化の流行があったことは間違いないだろう。海水館は二つの海水浴が楽しめる場であ

ったことが推測される。事実、先に挙げた明治学院大学藤村研究部「桜の実」第五号では、仙台石を張りめぐらした浴槽で終日湯がわかされていたことが報告されている。また、大正末期には、月島周辺に二十数件ほどの公私の水泳場が存在していたことも、東京都中央区編『中央区三十年史上巻』(東京都中央区、一九八〇、一二〇六頁)より明らかにされている。その詳細な位置情報は、中央区企画部広報課編『中央区区内散歩―史跡と歴史を訪ねて―第八集』(中央区企画部広報課、二〇一〇、一三四―一四三頁)いわく、主に月島三号地、つまり勝どき五・六丁目に集中していたようだが、海水館の近く、新佃西町の相生橋がかかる場所にも水練場が存在していたらしい。

上記のことを踏まえると、営業当初の広告記事に「御休憩」とあるのは、海辺で潮を浴び、水泳や潮干狩りに釣りなどを楽しむ人々の一時的な利用(昼食・温浴など)を促すものであったことが考えられる。このように海水館は、東京・月島の手を楽しむための重要な拠点であった。

### 第三章 海水館における文学―『大川端』『苦しき人々』

#### 海水館に関わる文学作品

これまでの調査・報告には、海水館で執筆もしくは海水館周辺の様相を描いた作品群が掲載されている。それらを改めて並べると、島崎藤村『春』、小山内薫『大川端』、吉井勇『新佃閑居』(『毒うつぎ』)、三木露風『白き手の獵人』、横山健堂『大西郷』……というようになる。しかし、これまで海水館が小説内

でどのように表象され、また小説内でどんな役割を果たしたのかということは論じられていない。よって本章では、小山内薫『大川端』、島崎藤村『苦しき人々』の二作品を中心テクストとして、海水館との関係性を示しつつ、新たな作品の読みの提示を行うことで、当館の文学空間の有効性を浮かび上がらせたい。

### 小山内薫『大川端』

小山内薫が海水館に滞在したのは、明治四十二年からであった。期間は詳らかではないが、『大川端』(『読売新聞』明治四十四年八月八日(九月十三日))を海水館で執筆したことから、長く滞在していたことが類推される。そのかわりで市川左團次とともに「自由劇場」の準備も行っていた。「大川端」はその後、「新小説」(明治四十五年二月(三月))や「文芸倶楽部」(大正元年十一月)、「中央公論」(大正元年十二月)で書き継がれ、単行本として樺山書店から大正二年一月に刊行された。

本小説のあらすじは以下の通りである。日露戦争が終わった頃、山の手の芸者屋町で育った小川正雄は大学を卒業し、龍閑橋の伯父の世話で、中洲の芝居小屋(真砂座)の芝居作者の見習いとなる。そこで気に入られた木場の若旦那の福井の導きによつて大川端の華やかな歓楽街へと足を踏みいれてゆく。純情な正雄が、君太郎、小さと、せつ子という三人の女性に恋い焦がれるものの、全て破綻する。大川端の街や人々の喜怒哀楽が、正雄を通して描かれるような小説だ。

先行研究はほとんど見当たらないが、林広親「小山内薫『大

川端』(明治の小説がいま新しい(特集) 明治の気になる小説を読む)」「國文學 解釈と教材の研究」三十九号、一九九四、六)が、従来の評価と新たな観点を提示している。林によれば、『大川端』には、自伝小説、風俗小説、花柳小説という三つの評価軸があるようだ。その上で、本小説に現れる多くの地名(中洲、浜町、芳町、柳町)に、架空(非在)の場所を加えることで現れる小説内のモザイク的な世界の魅力、そしてそれに憑りつかれた人間の精神の表現を見出している。大変参考になるが、本論考では豊かな小説世界が提示されたのみで、主人公である正雄の山の手から下町への移動という側面が抜け落ちている。

そもそも物語の始まりには正雄の盲目的な下町世界への憧れが存在していた。正雄は案内人である福井の導きによつて「遊び」の世界の風景や自由な気質を吸収してゆく。料理茶屋「新布袋屋」や芸者屋「柳家」に入り浸り、お上や女中とも仲良くなり、まるで下宿人もしくは使用人として扱われることさえ喜んでいたことは、その現れと言えよう。

正雄はそのような希求に沿って、住居を下町の方へと移している。一度目は山の手のある芸者町から代地河岸(柳橋)、二度目は代地河岸から佃島へと。その終着点が「海のはとりの假の宿」という、海水館らしき建物であった。

下宿は竹ちゃん世話で、佃島に好いのが見つかった。正雄は母が残して行つた家財の一部と自分の本とを車に積んで、洲崎の見える、海のはとりの假の宿に移った。――中略

一家が山の手の屋敷以上のものを都の一隅に築き上げて、前にも優る贅沢な生活に帰るのも、僅か一年か二年の内であらう。正雄はこんな事を考へて、寧ろ自分の生活の、前よりは自由になつたのを喜んだ。正雄の頭は、家の事より、せつ子の事で一杯になつてゐた。

父の事業の失敗という経済的な問題により佃島に流れ着いたものの、それが「假の宿」と信じ、むしろ自由を感じていることは、本論の一章で確認した歴史的背景にも結び着く。注目すべきなのは、正雄が水景に「洲崎」遊廓のみを見ていることだ。そこには初めて「新布袋屋」の「縁側とも附かない半端な板の間」に座つて見た大川の風景（船）や「月」、「セメントの煙突」……）はない。

色々な船が水の上を往來した。一錢蒸汽は日に何回となく向う河岸に近い方を登つたり降つたりした。石油發動機で動く船には木場の奥の郡部迄行く乗合と、中洲河岸から出て深川の工場へ通ふ東京印刷會社の持舟とがあつた。ダルマ形とか言ふ大きな黒い盥のやうな船も通つた。苦をかけた肥船も通つた。小山のやうに黒い泥を積んだ舟も通つた。夕方になると片手で櫂を操りながら豆腐を賣つて歩く田舟があつた。兩國から出る沙魚釣りの乗合舟が幾艘も幾艘も川下へ迂るやうに急いで行く事もあつた。

山の手から下町、そして海浜部へと移動し、大川により近づくながらも、逆説的にその風景が見られなくなっている。これは正雄が、三人の芸者との恋、芝居小屋での作劇、二回の転居を通して、憧れてゐた下町意識を獲得しつつあつたことを示しているようだ。つまり、正雄は、自身がよそ者として見つめていた下町風景の一部になり始めていたのである。

ただし、正雄は決して下町の人間になつたわけではなかつた。それは、君太郎、小さと、せつ子という芸者相手に、最後まで「人格」をもつて「愛や恋」という関係性を求めることから理解できる。むしろ、その山の手意識を衝突させるような行動は、下町／山の手を超えた自身のアイデンティティを再構築する試みのように受け取れる。小説の最後の場面、三人の女性たちへの恋が破綻した後の風景はその事を暗示しているようだ。

正雄は自分で自分の歩いてる道が分からなかつた。兩側の家が兩方から狭くなつて來たり、兩方へ廣がつて行つたりした。下駄が泥濘へ這入つたり、砂利の上でぐらついた。水のビチャビチャ跳ねる音がすると思つて、首を上げると、正雄は大きな川の縁を歩いてゐた。暗い川が暗い上から暗い下へ流れてゐる。暗い道が暗い川について續いてゐる。正雄は自分で自分のある所が見えなかつた。正雄は唯暗闇で足を動かしてゐた。なんにも考へずに足を動かしてゐた。

理想の世界であつたはずの大川端が「大きな川の縁」へと変わり、「暗い川が暗い上から暗い下へ流れてゐる」と無機的に感じられた時、正雄は下町や山の手といった土地意識を失い、「自分のゐる所」を見失っている。暗闇の中で自身の立脚点が見えなくなった状態である。しかし、その一方で「唯暗闇で足を動かしてゐた。なんにも考へずに足を動かしてゐた」というように、全く先の見えないなかで新たな立脚点の模索が始まっているのだ。

このように、正雄の軌跡と、「海のほとりの假の宿」以後に捉えられた風景を辿った時、彼が単に恋に破れた愚鈍な人間ではなく、むしろ自身のアイデンティティを模索していたことが考察されると共に、三人の女性たちが正雄に吸収されてしまった側面をも浮かび上がらせるだろう。

# 島崎藤村「苦しき人々」

島崎藤村が海水館に下宿したのは明治四十年九月から翌年の八月までだという。その際に『春』が執筆されたことから、海水館は「春を書いた家」として説明されることも多い。しかし、『春』には国府津の海辺は描かれるものの、東京の海浜もしくは海水館に関する記述は無い<sup>注23</sup>。

一方で、「苦しき人々」(明治四十二年一月「文章世界」という短編小説は、海水館という舞台を如何なく發揮した作品といえる。底の知れないおそれに悩まされる「わたし」(林)、親のように慕う知人で非職となった広岡老人、小学校時代の友だ

ちで精神病にかかった大竹君。三者三様の苦しさが「わたし」の眼差しから描かれた小説である。

この「わたし」が製図の仕事のために、秋から停泊し初めたのが「新佃の閑静な旅館」であつた。旅館までの道のりは両国から川蒸気で永代橋付近まで行き、その後相生橋を渡るという行程だという。

秋から、わたしは製図の仕事を急ぐために新佃の閑静な旅館へ移った。本所深川だけを取りのけて見ると、あたかも東京の市街は羽をひろげた一つの蝶である。その蝶のひげのように、隅田川の川口に添うて突出した島の一角がちょうどわたしの旅館のあるところだ。日曜ごとに、わたしはあの白いペンキ塗りの川蒸気に乗って、両国にある自分の家と永代橋との間を行ったり来たりした。船の窓から見える両岸の町々はみんなわたしの地図にはいるところだ。<sup>注24</sup>

小説内ではこの「旅館」について多くの事が語られている。なんでもその「旅館はかなり大きな建物で、下宿する客も大ぜいあつた。海の見える座敷はみんなフサがついていたから、余儀なくわたしは北向きの寒い部屋を選んで、そこで寝たり起きたりした」とのことだ。また、「こういう部屋の中へ楽しい日光を送るのは、ただ一つの窓で、その窓の下に青々とした草地が見える。草地の向こうには相生橋から月島へ通う広い平らな道の一部分も見える」とある。これらはほぼそのまま、藤村自身

の海水館での逗留がもととなっており、実際、藤村が泊まったのは、海水館二階の十三番の六畳間で、海とは反対側の中庭と物干に面した部屋であった。

上記のように藤村は海水館での体験を「苦しみ人々」に挿しこんでいるが、なかでも、海水館が仙台で休業となった女郎屋の材木を舟で運び再利用して建てられた、という設定を小説に巧みに取り入れている。

それは、十二月に大竹君が保養所から旅館に訪ねて来る一連の場面に見える。「わたし」は精神病に罹った大竹君を心配するが、かつて「回しを取った部屋」が「いっしょにわれわれが飯を食う」部屋になるという旅館の数奇な運命になぞらえるように、大竹君は「アベコベ」に「わたし」の健康を心配し始めるのだった。そして、それに伴うかのごとく、大竹君を月島の渡しの方へ送るまでの海辺の風景も、「動揺」し、「ごちゃごちゃ」した様相を示している。

日を受けて光る帆、動揺する海、いわしを分けるために諸方から岸へ集まった漁夫の群れ——そのごちゃごちゃしたありさまは間もなくわれわれの目の前にあった。ちょうど築地のほうへ出ようとする渡し舟に乗る前に、大竹君はちよつとわたしのほうへ向いて、握手を求めた。「まあ大事にしたまえ。」とわたしの顔を見て言つて、それから友だちは舟のほうへ急いだ。「どっちが——」と、もう一度友だちがわたしのほうを見て、思い出し笑いをしたころは、

舟がもう動き始めていた。

本小説の主題ともいえる「わたし」の「おそれ」は、このような反転可能な自己と他者の運命の数奇さにあるといつてよい。事実、小説内では反転または同一化の様相がしばしば描かれている。「どこまでが老人の逆境で、どこまでがわたしの艱難であるか、次第に差別のつかないようなものに思われてきた」。「大竹君を取りまく今の空気は遠慮なくわたしの内部へ侵入して来るように思われた」。自己と他者の運命はいつでも反転し兼ねず、その点では、「わたし」も、大竹君も広岡老人も同じ苦しみを背負っているのだった。

思えば、この「わたし」の自己と他者をめぐる思索のなかで、「製図」という仕事は示唆的であった。先にも触れたが、「わたし」はある会社から東京の市街を縮小した地図の作製を依頼されており、そのために「新佃の閑静な旅館」に滞在していた。そこには、自宅からの往還において地図に入れる両岸の町々を俯瞰でき、静かな場所で精力的に取り組めるという利点があっただろう。しかし、結果的には「製図を完成することができ」ず、「会社から受け取るべきものも受け取らなかった」のだった。その失敗は、自己と他者の線引きの失敗を暗に示しているようだ。地図を作製する事は線を引き、領域を定めてゆくことであり、自己と他者の境界が曖昧となつてしまつた「わたし」はその領域を明確に分けることが出来ず、それは「不完成の地図」にしかならなかつたのだ。

ただし、逆を返せば、「わたし」は、「新佃の閑静な旅館」における地図作成と友人との邂逅を通じて、自／他（主／客）の反転可能な語りを手に入れたとも言えよう。

そして、それはどこかで、島崎藤村が海水館において『春』を執筆した際に重なっている。『春』は岸本と青木、『文学界』の同人たちを主人公に設定し、自身の経験を織りこみつつ、「芸術の春」「理想の春」「人生の春」を描いた作品であるが、そこには藤村の分身である岸本や北村透谷をモデルとした青木を中心に、作中人物たちの心理と行動が描かれていた。むしろ、『春』は三人称小説であり、主客の位相に違いはある。

しかし、自／他の運命を同一的に語るといふ共通性、そして、『春』を執筆した経験を題材にしたという点は、「苦しき人々」という作品の意義を高めるだろう。数多く議論されている、藤村の『破戒』から『春』への小説方法の展開についてもささやかな手がかりとなる可能性がある。

## おわりに

月島という場所は、近代に生まれ、工業を背景に発展した新興地であり、住民の多くは他所からやって来た者が多く、地縁や血縁が薄い土地であった。なかでも海水館は、新佃島の「別荘地域」と呼ばれる場所に建てられており、水に隔てられた土地性と相まって、別世界の様相を示していた。人々は海水浴を主とした海辺の娯楽施設の拠点の一つとして、文士たちは世間から逃れ、アイデアを育む場所として活用した。作品のなかの

海水館も、文士たちの経験に重なるような役割を果たしており、『大川端』「苦しき人々」の主人公たちにとって、自己を見つめ直し、自身の立脚点を再構築するための場所であった。

本稿が論じて来たことをまとめると以上のようなになるが、海水館が内省を促す場であったことは海辺というトポスにも関わってくるだろう。例えば、民俗学者の谷川健一は渚を「現世と他界の接点」と捉え、生態学者の加藤真もその浄化機能に重ねて「人の心を洗う」場所として論じている。<sup>注26</sup>このような海辺の文化・文学空間がかつて、東京には存在していたのだ。<sup>注27</sup>

そして、このことは、単に新たな文学空間の発見にとどまらず、新たな文学空間の形態を見出すことにもつながるだろう。つまり、交流を通して新たな知を獲得するというような場的な場だけでなく、交流から離れて自身を見つめ直すような場も存在していたのだ。海水館は文学の発生の多様な在り方を示している。

## 注

1 今橋映子「序章 都市論は今」（『リーディングズ 都市と郊外―比較文化論への通路』（N-T-T出版、二〇〇四、九―十七頁）。

2 東京都歴史文化財団東京都江戸東京博物館編『江戸東京博物館 常設展示図録「図表編」―図表でみる江戸東京―』（東京都歴史文化財団東京都江戸東京博物館、二〇一七、一六六―一六七頁）の「東京の文化サロンと文士

村」では、十二の文士村とサロンが紹介されている。

- 3 例えばこのことは、東京都立中央図書館で二〇二〇年一月十八日～三月八日に行なわれた企画展示「東京ベイエリア」において作成された「主な展示資料リスト」に文化や文学にまつわる書籍がわずかしかなことも関係しているだろう。

- 4 長谷川徳之輔『東京の宅地形成史―「山の手」の西進』（住まいの図書館出版局、一九八八）や若林敬子『東京湾の環境問題史』（有斐閣、二〇〇〇）など。

- 5 東京の研究ではないが、このような研究の先駆けとして、鈴木健一編『海の文学史』（三弥井書店、二〇一六）、『浜辺の文学史』（三弥井書店、二〇一七）が挙げられる。〈海〉という視座から旧来の日本文学史を読み直すという取組みは参考になる。

- 6 野田宇太郎「春を書いた家」（『新東京文学散歩』日本読書新聞、一九五一）、「海水館」（『野田宇太郎文学散歩1 東京文学散歩 隅田川・江東篇』文一総合出版、一九七七）、「新佃海水館」（『風景と文学』文一総合出版、一九七九）、豊島寛彰『東京歴史散歩 第2集（隅田川とその両岸 上巻）』（芳洲書院、一九六一）、明治学院大学藤村研究部「桜の実 第五号」（一九六九年十二月）。

- 7 東京都中央区教育委員会編『中央区の文化財―史跡・旧跡記念碑』中央区教育委員会社会教育課、一九九五、六十九頁。

- 8 小澤尚「海水館の想像復元図の事例を通して——空間デザイン」の視覚情報伝達技術に関する研究・開発の事例」

- 9 『宮城大学事業構想学部紀要』第一号、一九九八）。中央区立郷土天文館「人物評伝の第一人者横山健堂と海水館」企画展（二〇一〇年一月十六日～二月二十一日）、

- 10 中央区立月島図書館「昔、佃に海水館があった」小展覧会（二〇一六年一〇月二十五日～十一月一日）。

- 11 現状、海水館設立の背景は坪井伊三郎氏から行った以下の聞き書きのみをもって説明されている。「霊岸島で蓄財した先代は、熱海で旅館を開こうと思った。ところが佃まできたとき、ここからの眺望のあまりの見事さに、『熱海へゆこうとする客をここでとめるのだ』とこの地で割烹旅館を始めてしまった」（前掲6「桜の実 第五号」二十六頁）。

- 12 月島周辺の歴史については、東京都中央区編『中央区史』（中巻、東京都中央区、一九五八、二二七～二二八頁）、『月島百景 佃・月島・勝どき・晴海・豊海水のまちの120年―中央区立郷土天文館第13回特別展』（中央区教育委員会、二〇一五、七～十四頁）などを参照した。四方田大彦はこのよそ者意識について以下のように語っている。「月島の独特の雰囲気がある。のちに魚河岸に重点が移ったが、造船所と町工場によって発展したこの町では、その由来を尋ねれば住民の誰もが他所者なのであって、彼らは傍の佃島を常に意識しながら緩やかにし

- て柔軟性に富んだ共同体意識を築きあげてきたのだ。そこで暗黙のうちに前提とされたのは、誰もがめいめいのそれなりに必然的な事情に応じて故郷を出奔しこの埋立地に住むに至ったという事実である』『月島物語ふたたび』（工作舎、二〇〇七、二九二頁）。
- 13 報告書は、『東京市京橋區月島に於ける實地調査報告 第一輯』（内務省衛生局編、一九二二）を主とし、データを収めた『東京市京橋區月島に於ける實地調査報告 第一輯（附録ノ一）』、社会地図と写真を収めた『東京市京橋區月島に於ける實地調査報告 第一輯（附録ノ二）』が附録となっている。以下引用する際には『第一輯』、『第一輯（附録ノ一）』、『第二輯（附録ノ二）』の略称を使う。
- 14 網野善彦『増補 無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和（平凡社ライブラリー）』平凡社、一九九六。
- 15 都市との接点を持ちつつも一種のアジール性を保ち続けられた要因として、月島そして海水館が水を隔てた世界であり、移動も「船」（佃島渡船や月島渡船）もしくは「橋」（相生橋）が主だったものであったことが挙げられる。
- 16 「新佃わがたましひの傷つけば堪へがたきまで寂しきところ」、「冬の見ればかなしや新佃海水館はわび住みにて」など。
- 17 図像資料の典拠は以下の通り。図像資料①小澤尚「海水館の想像復元図の事例を通して」（前掲8）、②野田宇太郎「海水館」（前掲6）、③『東京文学散歩 下町篇』（角川書店、一九五五）、④東京都中央区教育委員会編『中央区の文化財——史跡・旧跡記念碑』（前掲7）、⑤執筆者撮影（二〇二〇年十月二十日）。
- 18 「ミッドス歴史館」<https://database-yoninuri-co.jp/ez.wiki/waseda.ac.jp/rekishikan/>（二〇二〇年十月一日アクセス）。
- 19 これは、隅田川河岸に設置されていた各水練場が、都市建設の騒音や水質悪化の問題から近辺の海岸沿いに移転を進めた結果であるという。この動きは警視庁による隅田川での水泳全面禁止（大正六年）を受けて活発化したようで、周辺は盛行し、海水浴場として発展した。
- 20 ここでいう「佃島」は佃島・新佃島を含む範囲と考えられる。先述の通り、新佃島は佃島を拡張して形成されたもので、佃島とまとめて呼ばれることもあった。
- 21 『大川端』の引用は、小山内薫『大川端』（榎山書店、一九一三）に拠る。
- 22 島崎藤村は「小山内薫氏の印象」（『新潮』大正七年十一月号）において、この正雄の下町意識の獲得を、小山内薫自身を重ね合せながら以下のように論じている。「君の『大川端』を読むと、山の手で修業を積んだアンテリジャンな青年が全く生い立ちを異にした下町の若い人達に寄せた情緒と悲哀とがあらはれて居る」。本文において、

藤村は「自由劇場」を「下町」と「山の手」を結んで形成されたものと捉えており、その観点からの考察が可能であれば、近世／近代、下町／山の手の混在する佃島・海水館ほど、「自由劇場」の準備に適した場所はなかったと言えよう。

23

小林一郎『春』論―「風土」を視点にして―（『島崎藤村研究』、教育出版センター、一九八六）によれば、「海辺」にまつわる章は計十一章あり、そのうち九章が国府津の海辺の風景だという。

24

「苦しき人々」からの引用は、『藤村全集 第3巻』（筑摩書房、一九六七）に拠る。

25

『春』を書きつある島崎藤村氏」（『新思潮』一九〇七年九月）。

26

谷川健一『渚の思想』（晶文社、二〇〇四）、加藤真『日本の渚―失われゆく海辺の自然』（岩波書店、一九九九）。

27

瀬崎圭二は『海辺の恋と日本人―ひと夏の物語と近代』（青弓社、二〇一三）のなかで、海辺がロマンチック・ドラマチックな恋愛物語が織り成す空間であることを強調したが、本稿ではむしろ、その内省的な空間としての海辺を浮かび上がらせた。

（いとう・ひろき 博士前期課程修了）